

五十嵐太郎の先読み編集部

巨人・コールハースの
全貌を知る格好の教材

ア・カインド・オブ・アーキテクト



2008年12月24日、恋愛資本主義がキリスト教を消費する夜に、世界の席卷するグローバリズム経済と格闘する建築家レム・コールハースを題材とするドキュメンタリーが渋谷のアップリンクにて上映された。マーカス・ハイディングスフェルダートとミン・テシュ監督の『レム・コールハース:ア・カインド・オブ・アーキテクト』(2007年)は、通常の建築映画とは違い、空間の体験を追体験するようなシーンがほとんど存在しない。建築巨人のプロジェクト、著作、コンペ案、本人のインタビュー、関係者の証言などが、圧倒的に高密度な情報が矢継ぎ早に示され、駆け抜けていく。しかも編集のマニエリスムというべき映像処理の手の多さ。こうした手法は、まさにコールハースそのものである。彼は、編集者のように、あらゆるものを飲み込みながら、的確にそして刺激的にアウトプットを行うからだ。

この映画は、コールハースの生い立ちから北京のCCTVまでを網羅し、彼の入門映像としておすすめである。もっとも、あまりにも情報が多いから、何度か見直す必要があるだろう。また、ある程度彼を知っている人にとっても、レアな映像やネタが多く、十分に楽しめる内容だ。例えば筆者は、コールハースが建築家を目指す前に映画の制作にたずさわっていたことは知っていたが、本作で初めて当時の

いがらし・たろう

建築史家、東北大学准教授。
1967年パリ生まれ。
東京大学工学系大学院修了。
博士(工学)。中部大学助教授を経て、現在東北大学大学院工学研究科准教授。



フィルムを鑑賞することができた。

またジャーナリストだったときのエピソードも興味深い。

特に彼がシチュアシオニストのコンスタント・ニーベンホイスにインタビューを行い、建築に開眼したことは、まださほど知られていないはずだ。そしてAAスクール時代に、コールハースがベルリンの壁をテーマにレポートを書き、「エクソダス、あるいは建築の自発的な囚人」のプロジェクト(今風に言えば、ゲーテッド・コミュニティか)に反映させたことも、彼の原点を知るうえでも重要なネタである。ともあれ、さまざまな解釈を可能にする建築映画といえるだろう。

これは1月にDVDがリリースされるが、3つの特典映像も付く。特に編集なしの映像では、いつのまにか逆インタビューをしてしまうコールハースの性格や、普段のどうでもい日常のふるまいも見る事ができる。さらに家政婦の視点からボルドーの住宅を撮影した『コールハース:ハウスライフ』のDVD化も予定されている。こちらは対照的にひとつの建築の空間を徹底的に映し出す。今年にコールハースを映像で楽しみたい。

今月のPick up Person



レム・コールハース Rem Koolhaas
1944年 オランダ・ロッテルダム生まれ。クンスト
ハル(1992)、シアトル中央図書館(2004)など作
品多数。著書に『錯乱のニューヨーク』『S,M,L,XL』
ほか。2000年プリツカー賞。◆Rem Koolhaas: A
Kind of Architect 本編97分+特典126分、字幕
監修・エッセイ/浅田彰、¥6,090(税込)